

扇子、団扇

扇子、団扇、中啓は同じたぐいのものであり、そのなかでも古くからあるのは団扇であつて、これは支那から伝わつたもので「和名抄」によると

唐令云、団扇方扇、和名宇知波（うちわ）

と書かれてあり支那の唐の頃製造されたもので扇子よりは、はるかに古くいまから千二百余年前奈良朝時代、唐の名僧鑑真が日本につたえたといわれ、一説には聖徳太子が始めてこれを考案したとも伝えられているが事實はそれ以前からあつた筈だと（事物起源考）が伝えている。

古くはこれで羽虫や蠅を追い払つたので打羽と呼んでいたものが、これに風流が加つて団扇と呼ばれるようになった。火を煽いだり虫を打払つていた時代の頃は上流社会だけが使つていたといわれている。扇はたたむことが出来るのに対して、団扇はたためないのが特徴で種類は形によつて円形、卵形、方形等がある。また材料による種類としては

- (1) 紙 団扇・・・・・・紙をはつた普通のうちわ
- (2) 渋うちわ・・・・・・別名柿うちわ、反古紙をはつて柿渋を塗つたもの
- (3) 羽 田扇・・・・・・天狗の絵にあるような鳥の羽で作つたうちわ
- (4) 檳榔団扇・・・・・・蒲葵の葉を円く切つて縁をつけたもの
- (5) 絹 団扇・・・・・・柄に丸い枠をつけて絹を張つたもの（文化文政頃流行した）
- (6) 綱代団扇・・・・・・九折織を丸く切り、これに紙を張り、黒漆をぬり柄をつけたもの

などがあり形も一定していない、室町末期の俳諧師山崎宗鑑の

月に柄をさしたらばよき団扇哉

の句がある。

大和の唐招提寺で五月十九日うちわ撒き法要が行われるがその由緒をこう伝えている。

この法要は寺の中興、覺盛大悲菩薩の忌日を祀るもので、正しくは梵網会と呼ぶ、覺盛は西大寺思円上人叡尊とともに鎌倉時代における最もすぐれたれ高僧の一人であつた、五月といえばそろそろ気の早い蚊が境内に生れることである。

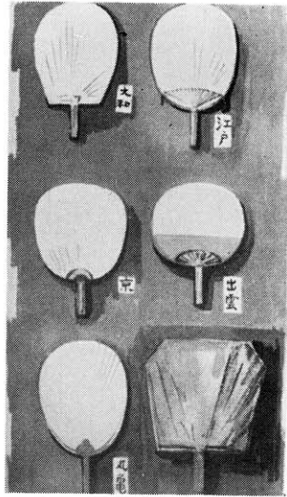
菩薩が群がるその蚊を追い払おうとせず僧房に正座していた。弟子たちが見兼ねてこれを追おうとすると、「かまわずにおきなさい、蚊に血を与えるのも波羅密の行である」といつたと伝える。

その徳を偲んで忌日の法要に法華寺の尼僧たちが靈前に宝扇を供えたうちわ撒きは、法要後その宝扇を参詣の人たちに頒つた事に発端して、爾来今日まで続けられている。

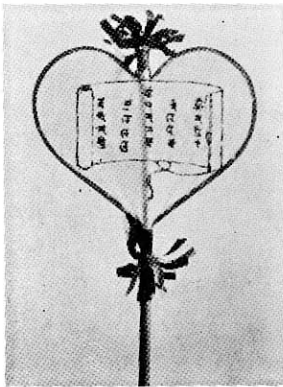
寺僧や世話人達が鼓樓の二階にあらわれ何千本の団扇がこの楼上から撒かれる。この団扇は除災除病に靈驗ありとされ農家ではこれを苗代に立てて虫除けともする風習が今に残っている。

東京都府中市のおもな年中行事の一つに武蔵総社大國魂神社のスモモ祭りがあり、この日神社から烏扇が売られる。

この祭の起源は、前九年の役中、永承六年六月に朝廷の命により、源頼義、義家の父子が、奥州の豪族、安部頼時、貞任を討伐する途中この大國魂神社に祈願をし、無事安部一族をほろぼして大任を果す事が出来た。この



団扇図



唐招提寺宝扇（奈良）



唐招提寺の5月18日のうちわきま

時から大國魂神社では六月二十日にスモモやアワ飯を神に供えるようになった。現在このスモモ祭は七月二十日に行われているが、この日はモモを食べると食あたりや流行病の難をまぬかれ、又暑気をはらうといわれている。神社では鳥扇カラスと呼ばれて（シブウチワをまつ黒に塗つた上に、カラスの型をおき、胡粉を吹きかけてカラスを浮き出させ、裏には同じように鳥絵が浮き出している）ウチワを売る。そしてこのウチワは大國魂神社の境内で買ったものでなければ、御利益がないと言ふ意味の「宮の内」の字が書きこまれている、このウチワは田畑の虫除けのおまじないで古くから作られていて何万という数が売れている。

府中小唄の一節で

武蔵総社の明神さまはヨ

李祭すももに桃の市

あれは厄除け福扇

鳥扇も束で売る

とうたわれている。

徳川時代の民衆の間では、貞享から元禄のはじめ頃、女は内でも外でも、皆扇は用いず団扇を用いたといわれこれ等は浮世絵版画をはじめた菱川師宣の絵などにもあらわれている。

絹うちわは、円き枠に、絹を張り、骨無くして直に柄をつけ、絹には絵を描けるもの、文政、天保の頃流行したといわれる。

うちわは古くから信仰とむすびついて、悪魔はらいや災害除けなどに利用されたのであり、江戸時代貧乏をよ

らわす絵に洩うちわが描かれているものなどがあつた。ところが「左うちわ」の言葉がありこの言葉は今もつかわれている、左うちわとは経済的にめぐまれるようになった人、昔は特に娘などを売つて急にゆたかになつた人などにつかわれたようで、この左うちわの意味は

涼風はひだりあふぎか秋の空

秋が近づけば夏のあいだほどのきびしい暑さも去り、力の弱い左の手であおいでもすむ、すなわち、らくになつたの意に用いられている。

扇子は日本で造りはじめられたもので蝙蝠を見て考えついたといわれており、形は蝙蝠のやうで、そのためカワホリ（蝙蝠のこと）と呼ばれたやうで（枕の草子）に

・・・また、をりからあはれなりし、人のふみ、雨など降り、つれづれなる日探し出でたる去年のかはほり・・・とある。

扇をはじめて作つた人は神宮皇后とか武内宿弥などといわれているが、これは信用出来ない。平安朝時代に、まつ板扇をはじめて作られたやうで、これは桧材をもつて作られ天皇、皇后、東宮、親王、公卿、妃嬪、女房など宮中の男女が使用したもので、高貴の方が、影（顔）を蔽う道具にも使用されたと謂はれている。しかし

（万葉集）に

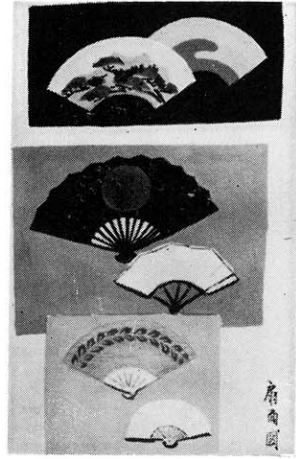
常之倍爾。夏冬往哉。裘。扇不放。山住人

とあるので奈良朝時代の始めごろすでに扇が用いられておつたのではなからうか。

枕草子にある

京うちわ

京扇子



扇面図



地紙売り



地紙売り

御乳母の大輔の命婦、日向へ下るに、賜はる扇どものなかに、片つかたは、日というららかにさしたる、田舎の館たちなどおほくして、いま片つかたは、京のさるべきところにて、雨いみじう降りたるに……とあるは、この時代の扇は片面だけ紙がはつてあつて裏面は骨が出ていたので紙の方を二分してかいたので（片つかた）（いま片つかた）とあるが紙のある方の一面のみをいつたものといわれている。

竹生島、江の島とともにわが国の三弁天として知られる嚴島神社秘藏の重要文化財、八十代高倉天皇（七百七十余年前）御物、五本骨夏扇は、平安朝の極めて貴重なものとされて居るが、その形の上から影（顔）を蔽う事にも使用されたであろう事が推定される。

扇面にて顔を蔽ふ意味は、君主は如何なる場合も家臣に対して喜怒哀楽の色を見せてはならぬ、もしそれを顔にだせば、家臣は必ずその顔色をよみとり、その意をむかえんとこびへつらい、虚言を用いることにもなる、これでは忠義直練の士は育たないし、ひいては政治が乱れる、君主がスダレをへだてて家臣と相対したのは威厳をつけるためばかりでなく顔の表情を見せない為でもあつたのであるという。

源氏物語に

つつましげに下るるを見れば、まづ頭つきやうだい細やかにあてなる程は、いとよう物思ひ出でられぬべし、扇をつとさし隠したれば、顔は見えぬ程もとなくて、胸うち潰れつつ見給ふと浮舟が扇で顔を隠すことがしられ

（更級日記）に

……扇さしかくして、うたうたひたる、いとあはれに見ゆ……

とありここにも扇で顔を隠すの意が見られる。

更に杉板をあんで作つた杉扇などもあり松扇、杉扇のように板を編んで作つた扇を冬扇と呼び、現今用いているように紙製の扇、すなわち、かわほり、末広中啓などを夏扇と呼んだようである。

最初は松扇（冬扇）は束帯姿の時に用い、直衣の時にかわほり（夏扇）を用いる習慣であり、末広は竹骨七本というのが本式とされていたという。

扇面に絵をかく事は、わが国独特のもので平安時代から盛んに行われたとあるが、俵屋宗達の扇面画は最も優れたものといわれ、これ等優秀な扇面画を貼交屏風として保存されたもので、屏風に扇面形を図案的に配して描いたもの扇面散屏風、扇面流屏風などの意匠も宗達から始まつたのであらうとあるが、その描かれている扇の骨の数は十三本、十五本、十七本などがあり

（大鏡）に

黒柿くろがきの骨の九つあるに、黄なる紙はりたる扇をさしかくして、けしきだち笑ふほどもさすがにかしとある。

扇の造り方に籠骨こめぼねの名があつたようである。

狂言目近大名

こめぼねというは、この扇の骨を、つねは十本あれど十二本か十五本にこめたをこめぼねという

とあり、色三味線に

これは、ここに置いた扇が見えぬ、われらが持ちしは、十一骨の有禪が絵に、ゆく水に茶筌を書いて、流

れを立てるとこじや

とある。

扇面写経(扇面法華経冊子) (国宝) は法華経や開結経が書かれており、この料紙の下絵は経文と関係ない題材が選ばれておつて、各種の絵巻物のよい場面を抜萃した観が深く大和絵の華麗優雅な趣を展開しているといわれ、これらの扇面を使用した時代が文治四年九月十六日四天王寺で、如法経十種供養が観性法橋が願主となつて、藤原兼美が檀越となつて行つたとあり、今のこる原物もその当時のものと思われており、現在、扇面写経は四天王寺に九十八枚、東京国立博物館に二十二枚その他数枚が法隆寺、西教寺にあり、この下絵は墨刷の版画であり量産のあとをほのめかしているといわれる。

(方丈記)に

・・・とかく移りゆくほどに、扇をひろげたるがごとく末広がりになりぬ・・・とあり末広という呼称はその後出来たよび名とも察せられる。

中啓はいわゆる夏扇の一種で、中ひろがりであるので、形の上から末広に対して中啓といつたようで、これも平安時代頃は既にあつたようであるので能楽で用いる扇は、多くこの中啓扇である。

扇の大きさや形、材料、扇面の図案などによつても多分に人柄がうかがわれると思うような事は今も昔も変りがないようである。

奈良時代より扇合せも行われ

大鏡に

又殿上の人々、あふぎどもしてまゐらするに、こと人々は、ほねにまきゑをし、或はしろかね、こがね、ぢん、したんのほねになん、すじをいれ、ほり物をし、えもいはぬ紙どもに、人のなべてしらぬ歌や詩や、又六十余国の歌まくら、名あがりたるところなどを、かきつつまゐらするに、例のこの行成は、ほねのうるしばかりを、をかしげにぬりて、黄なるからかみのしたゑ、ほのかにをかしきほどなるに、おもてのかたには、樂府がふをうるはしう、真にかき、うらには御筆をとどめて、草にめでたくかきて、たてまつり給へりければ、うちかへしうちかへし、御門御らんじて、御手箱に入させたまひて、いみしき御たからとおぼしめしたりければ、このあふぎどもは、ただ御らんじけうずるばかりにてやみ侍りにけり、帝王みかどの御感みかどはべるに、ますことやはあるべきよな

とあり

(枕の草子)に

・・・中納言殿まゐりたまひて、御扇たてまつらせたまふに「隆家こそいみじき骨は得て待れ、それをはらせてまゐらせむとするに、おぼろげの紙はえはるまじければもとめ侍るなり」・・・とある。

扇は平安時代の末に支那に渡り支那風に作られ唐扇となり骨に竹以外の白檀、黒檀、象牙などを用ひるようになったといわれるがそれ以前から扇は支那にあつたのではあるまいかといふことは支那に(秋の扇)のたとえがある。

漢の成帝の寵愛をうけた班婕妤はんせつよにかわつて趙飛燕ちゆうひえん姉妹が帝の御眼にとまり、姉妹して後宮の寵を専らにし、

遂に帝の寵遇を失つた班健仔、移りやすい恩愛にもう必要がなくなつて捨てられた秋の扇のように、との意で男の愛をうしなつた女にたとえて用いられている。

芭蕉の句に

物書いて扇引きさく余波哉なまり

秋になつて扇がいらなくなつたので捨てようと思うが、今まで使い馴らした扇だと思つと、ただ捨てるのも惜しい気がする。そこで字を書いてみる、字を書いてから、思いきつて引き裂いてしまふ、さても名残の措しまれることだとの意。

扇の作り方は字紙を折つて置いてあとから骨を差入れるので扇を作る人を（扇折り）と呼んでおつたものものようである。

歌舞伎劇

扇屋熊谷

で扇折りのしぐさがみられるが、これは平敦盛が扇屋に潜伏せるを熊谷直実が発見せらるるところを演ずるもの、平敦盛の室、蓮華尼が京都の御影堂に閑居して、阿古女扇を製したことあるにより脚色したものという。

（常盤津）の辰橋に

父は五条の扇折、舞を好みて舞ひし故……………

とあり、また江戸時代の（黄表紙）に

まだ夏も来ぬに地紙売りとでかけ……………

とあつて扇の地紙を売る行商人が四月なかばから六月頃迄、若い男がだてな衣裳に足袋、雪踏などをはき地紙の形をした箱をかついで呼びあるき、時には求めに応じて即座に折り立てたり、役者の声色や真似などをしたりして女の歡心をかつて売りつけたものである。

ともあるので、いにしえは選んだ骨に好みの地紙を貼つて用いる人も多くあつたものであろう。

古川柳に

地紙うり梅幸に似て二度呼ばれ

団扇うり少しあおいで出して見せ

親に勘当されたドラ息子もあつたようで

地紙うり母に逢ふのも垣根ごし

と父親に逢えないさまなどをよまれたものもある。

江戸に風物をもたらしこの扇売りも寛政時までで絶えたという。

武蔵国川越の喜多院にある重要文化財狩野吉信筆

職人 尽 屏 風 絵

(扇師)に往時の扇師のありさまがみられ刷毛の画も書かれている。狩野吉信は今から二百八十七年前に死没して居るので、この絵は三百年位前のものであろうと思われる。

扇は平安朝の公家にあつては涼を送るものとしてよりも儀礼用の具としての方に重きを置いていたので今日でもその風習は伝えられている。また源平時代の大將は扇を以て兵を指揮し軍扇の名が出現した。

この軍扇は長さ一尺二寸、骨は十二本黒漆を塗り地紙に日月或は九曜などを描く

とある

軍扇は昔支那にもあつたものようである

(書言故事)に

諸葛亮、司馬懿と渭浜に戦ふや白羽扇を持して三軍を指揮す、衆軍その進止に随ひぬ。

とある。

武田信玄が軍扇を使つた事も知られているが、これは団扇であろうか。

戦国時代の永禄四年九月十日、川中島の戦いで、越後の精兵一万三千をひきいる上杉謙信の(車懸)の戦法に対し、信玄は軍勢一万八千(鶴翼十二段)の備えをもつてこれに応じた。乱戦の折、信玄は黒糸おどしの鎧の上に緋の法衣をきて、床几にかけたまま味方を指揮していたところへ、突如、砂けむりをまきたてて上杉謙信ただ一騎、放生月毛の名馬にまたがり、とびこみざま二尺四寸五分長光の太刀をふりかざし流星一闪、信玄に一撃をくわえた。信玄はどつきに手にした軍扇でふせいだが肩さきをきりつけられた。つづいて切り込むすどい太刀音に信玄の家来原大隅守が槍で、謙信の馬を突いたので馬は驚いてはねあがり、十年の遺恨もむなく流星光底長蛇を逸し兵をまとめ、越後をさして陣をひきあげたのである。

扇についての平家物語、一の谷の合戦に敗れた平家は讃岐国屋島に退いた、そのおりの那須与一宗高の扇的はあまりにも有名である。

沖より、尋常に飾つたる小船を一艘、みぎはへ向ひてこぎ寄せけり、なぎさより七、八段ばかりになりし

かは、舟を横さまになす、「あれはいかに」と見るところに、船のうちより、年の齡十八、九ばかりなる女房の、柳の五衣に、紅の扇の日出だしたるを、船のせがひにはさみ立てて、なぎさへ向かつてぞ招きける。……与一そのころは、いまだ二十ばかりの男なり、褐に、赤地の錦をもつて、袴・袴・袴いろへたる直垂に、萌黄にほひの鎧着て、足白の太刀をはき、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑にたかの羽割り合はせてはいたりける、ぬための鎧をぞ差添へたる、滋籐の弓わきにはさみ、甲をば脱いで高ひもにかけ、……沖には平家船を一面に並べて見物す、なぎさには源氏、くつわを並べてこれを見る、いづれもいづれも晴れならずといふことなし……与一目をふさいで、「南無八幡大菩薩、別してはわが国の神明、日光権現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はくばあの扇のまん中射させてたばせ給へ、これを射損するほどならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向かふべからず、いま一度本国へ迎えんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな」と心の内に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにぞなつたりける。与一鎧を取つてつがひ、よつ引いてひやうと放つ、小兵という条、十二束三伏、弓は強し、鎧は浦響くほどに長鳴りして、誤たず扇の要きは一寸ばかりを射て、ひふつとぞ射切つたる鎧は海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける、みな紅の扇の日出だしたるが、夕日の輝いたるに、白波の上に漂ひ、浮きつ沈みつとぞ散れば、沖には平家、舟ばたをたたいて感じたり、陸には源氏、箆をたたいてどよめきけり。

とあり、まことに一幅の絵をみるような物語りであるがこれも船中の美女玉虫前のかかげた一本の扇のかもしれない情影であり玉虫前は

時ならぬ花や紅葉と見えるかな、芳野初瀬の釐ならぬと

と一首の歌をよんでいる。

歌舞伎劇に「扇的西海硯」があるがこれは「那須与一西海硯」という義太夫節の曲名で作者は並木宗輔、並木大作の合作になったもので初演は享保十九年八月大阪豊竹座であつたがこれを歌舞伎作者で有名な勝彦蔵が脚色して「扇的西海硯」となつたのである。

投扇興という遊びもおこなわれたが、投扇興は安永年間大坂町人其扇が偶然に考へついた遊戯で塗枕を置きその上の的をのせ水引をかけておいて、これを扇を投げて落す遊戯で、安永年間から始まり江戸中期天下安逸の夢をむさぼる徳川時代、町民もまた太平を謳歌、遊びにふけた。この頃投扇興は特に盛んに流行し、貴賤の別なくこれを弄び、遂には賭博にも利用され、取締りがだんだん嚴重になつたのであるが、みごとにまき絵の枕を的台にして、蝶の形をした的をのせ水引をかけて、金銀に桜やもみじを散らした扇が、春めく夜の灯の下で、美しい人の織手から投げられ、ひらりと舞つて的にあたる、扇と的の位置で点がきめられ、思わず笑いさざめく声もあてやかな、みやびた、昔の室内遊びであつて、人形の寺として名高い京都の宝鏡寺に今もその名残りがあつた。

投扇式の序に

投扇散人其扇とかいへる人は、花都の産なり、頃しも安永二つのとし、水無月みなつきのゑんしよに堪えかね、昼寝の夢さめて、座上にのこせる木枕の上に胡蝶一つ羽をやすむ、其扇、傍にありし扇を取つてかの蝶に投げれば、扇は枕の上にとどまり、胡蝶はるかに飛去りぬ、そのさま久しき手練なりとも、かくはあらじと、われながらいみじきことにおぼえて、いま一度扇をとつて幾十返りかこれを投げるといへども、枕の

前後におちて枕上にとどまらず、これより投壺の遊びをおもひよりて通宝十二字を懷紙につつみ、枕の上において扇をもつて彼になげ、勝負をあらそひ、酒宴をまうけたらんには、かの投壺の礼法をごそかに、調度敷にして、その業の煩らはしきにはしかざらんかと、投扇興と名づけてもつぱらこれをもてあそび、遊興の一助となし

とあり、これより江戸においてもさかんに流行せしものとある。

元禄時代蒔絵の扇がつくられたよう

元禄十六年の秋、仕出しまき絵扇といえる持扇をこしらへ初めたり、これ、人と、膝を容るるに水酒のしづくをふせぐためなり、地扇を、漆にて染め、まき絵、赤漆をかきたるもの

とあり、連歌扇は席上にて音のせぬために、要をぬき、小紐にてしめて遣ふもの、伊勢音頭二見真砂

その絵扇の月に雲、かくせばかくす忍び路の、車扇の百夜にも、かざし扇のさりきらひ、れんかあふぎのてにはさへ

とある。

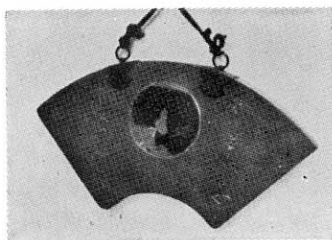
田楽舞の起りは、往古は天然物ばかりを食料にしていたものが、米を作る事を始め、四世紀から五世紀の末にかけて摂津、河内、和泉で大規模な開拓が行なわれ、屯田みやの耕作に住民がかりだされたが、これら住民は食物を与えられるだけで徴用されるので、収穫物は自分のものでないから仕事に熱がはいらない、これを督励するため田植をする時一定の調子をととえのるリズムの必要上鳴物入りの田楽が生れたので、この田楽舞も扇を持つて舞つた事を古い絵画によつて知る事が出来る。

投扇興



扇の舞い

江戸時代の
扇子の看板



舞踊の世界では、雅楽と義太夫節とを除けば扇を使わない舞踊はないといわれている。

能楽にも扇がつかわれるが、能楽の起源は古くは散楽、猿楽、申楽などといわれていた。室町時代のはじめごろ、奈良春日神社の神事に奉仕していた観世左近太夫清次が、京都熊野に能を演じ、將軍足利義満にその天才をみとめられ、上臈にも、法楽にも、観進にも出演し、その子世阿弥元清は父の芸風に田楽の長所をとり入れ、舞の手に舞楽、近年舞、曲舞、歌の節には曲舞節、小歌節、平家節、白拍子などの粋をあつめこれに詩的な文により綜合芸術としたのがはじまりといわれ、能楽には観世宗家のほかに金春喜氏、宝生蓮阿弥、金剛氏勝、喜多長能によつて立てられた四派と、明治年代に独立した梅若氏勝の五流がある。

扇を必ず使う芸者の始まりは白拍子だといわれるが白拍子について（徒然草）に

多おほ久ひさ資すけが申しけるは通憲入道、舞の手の中に、興ある事どもを選びて、磯の禪師といひける女に教え舞はせけり、白き水干に鞆巻たぬまきをさせ、鳥帽子をひき入れたりければ、田舞とぞいひける、禪師が女静むすめといひける、此の芸を継げり、これ白拍子の根元なり

とある。

白拍子静は義経の愛妾となるが、義経は平家を壇の浦にほろぼし京都の堀川に館をかまえていたが、兄頼朝に謀叛むぼんをうたがわれ、土佐坊昌俊の夜うちにあい、これをのがれ数人の家臣と山伏の姿に身をかえ雪の吉野山にわけ入つたが、頼朝の追及きびしくわづか五日間で、滞在の吉水院をあとに、吹雪の中を峯ふかい山路を落ちて行く。

義経にわかれた静は、雪の中にとらえられ、鎌倉に送られ、文治二年四月八日八幡宮社殿のまわり廊下で舞い

の奉納をのぞまれ、頼朝の前で、工藤祐経のつつみ、畠山重忠の銅拍子で扇をかざして

吉野山みねの白雪ふみわけていりにし人のあとぞこひしき

しづやしづ賤のおだまきくり返し昔を今になすよしもがな

とうたいながら舞つたのは有名な話して、みる人いづれもその心情をあわれんで感動したが頼朝は「叛逆人義経をしたう曲をうたうとはもつてのほか」と怒るが政子のとりなしでこの場はおさまり、その後釈放されたが、その行方はわからない。

義太夫の起源は大阪東成郡四天王寺村の農夫五郎兵衛が井上播磨掾の門弟清水理兵衛に学び、自然に備る天才であつたが、諸流の長所を綜合して一流を案出、貞享二年竹本義太夫と改名して大阪道頓堀に操芝居を興行したのが始まりで、近松門左衛門は義太夫のために新作を試み貞享三年に「出世景清」を書いたのを手始めに爾来義太夫は近松の次々の新作を語つて名声をあげた。

長唄は元和の頃に流行したといわれるが、それは今日の長唄とは別個のものといわれ長唄は元祖を中村勘三郎といひ小唄の名人であつた杵屋勘五郎、同六左衛門、同喜三郎等が一派をなしたもので三代目勘五郎に至り七段獅子の秘曲を作つて大江戸歌舞伎三絃の元祖となつたものといわれる。

常盤津は初代文字太夫が安永十年二月一日に歿し、その門人兼太夫が天明七年に養子となつて文字太夫の名を継ぎ、この頃から大いに盛んになつたとあるが、常盤津は義太夫と違い江戸で生れたものであるから、江戸趣味を帯び洩い中にも粋なところがあり、その頃の江戸ツ子に喜ばれたものであつた。この常盤津から分れて富本が生れ、富本から分れて清元という一流が現われた。

元祖清元延寿太夫は、元祖富本豊前掾の高弟、初代延寿斎の門人となり富本を学び、文化十一年清元延寿太夫と称して十一月市村座に出勤したのが清元の芝居に出演した初めであり、これはまた粋なもので、下品であるというものもあるが、義太夫のようなドッシリしたものより、裏声で軽妙に語る味が江戸ツ子の趣味にあつたものといわれる。このほか一中節、豊後節、江戸節、河東節などの浄瑠璃、端唄、小唄などの舞踊には必ず扇がつかわれる。

扇の種類は実に多く用途により区別されているものを数えても

小 謡 扇
仕 舞 扇
舞 扇
小 唄 扇
茶 席 扇
白 扇

など、この外にも沢山の種類があり、朝鮮扇、支那扇など片側にだけ紙を貼つたものもある。

この扇の両面に紙を貼る作りかたは足利時代頃からの事で、古くは片側に骨が出ていたものであるとの事である。

右のうち舞扇などは形は同じでも図案がちがうようで、普通各流派の紋、或は紋を図案化したものを用いて居るようであり、その流派がまた、たくさんある、次に列挙すれば

赤堀流	曙流	東流	吾妻流	京井上流	市川流	市山流松派	泉流	岩井流	煤茂都流	尾上流	音羽流	花月流	川口流	上方流	鹿島流	柏木流
家元	家元	宗家	宗家	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元	家元
赤堀鶴吉	曙佐和	東昶寿	吾妻徳穂	井上八千代	市川翠扇	市山松翁	泉徳右エ門	岩井紫若	煤茂都陸平	尾上菊之丞	音羽菊蔵	花月兼久	川口秀子	上方富久	鹿島ぼんた	柏木市猿

名古屋西川流から分離

藤間映紫の門人洋舞を入れた新派

花柳流からの分れ

六代目菊五郎の弟子が始めた

五代目菊五郎の弟子が始めた

江戸小唄から一派を立てた

山村流より分れた

水木流から一派をなす

柏木流琴章派
 神崎流
 菊川流
 工藤流
 雲井流
 五条流
 猿若流
 坂本流
 沢村流
 志賀山流
 嶋田流
 世家真流
 橘流
 藤蔭流
 中村流
 中村弥八
 中村虎治
 中村流本伝

柏木琴章
 神崎ひで
 菊川美代勝
 工藤倉鍵
 雲井扇楼
 五条珠実
 猿若清方
 坂本晴江
 沢村一寿
 志賀山勢以
 嶋田霞山
 世家真大助
 橘拘流
 藤蔭静枝
 中村歌右衛門
 中村虎治
 中村富士郎

柏木流の弟子
 上方舞
 六代目菊五郎から一派を許さる
 山村流から分れた
 十五代羽左衛門から許さる
 藤間勘翁の弟子で一派をなす

松 本 流	松 島 流	松 賀 流	藤 村 流	勘 右 衛 門 家	勘 十 郎 家	藤 間 流	百 々 派 坂 東 流	坂 東 流	林 流	花 柳 流	花 園 流	西 崎 流	正 派 西 川 流	名 古 屋 西 川 流	西 川 流	七 扇 流
”	”	”	家 元	家 元	宗 家	”	”	”	”	”	”	”	”	家 元	宗 家	”
松 本 幸 四 郎	松 島 金 昇	松 賀 緑	藤 村 鶴 吉	藤 間 勘 右 衛 門	藤 間 勘 十 郎	勘 兵 衛 家、 勘 右 衛 門 家、 勘 十 郎 家	坂 東 百 々 一	坂 東 三 津 五 郎	林 き む 子	花 柳 寿 輔	花 園 歌 子	西 崎 緑	西 川 喜 州	西 川 鯉 三 郎	西 川 扇 藏	七 扇 花 助
												西 川 流 門 弟				

松本流米三派	〃	松本米三
松本御殿舞流	宗家	松本尚山
水木流	家元	水木歌山
山村流	宗家	山村若
吉村流	家元	吉村雄光
吉花流	〃	吉花春寿
若柳流	〃	若柳吉蔵
京都若柳流	〃	若柳吉世
正派若柳流	総務	若柳吉登代
若竹流	家元	若竹光寿
		坂東流から一派をなす

以上 (演劇博物館調)

平安朝時代に上流社会でおこなわれた雅遊のひとつに扇合せがある。これは多くの公卿や女房などが二た組にわかれて、おたがいにうつくしい絵などをかいた扇を出し、これをあわせてその優劣をきそい興がったもので、扇合せで名だかかつたのは天禄四年七月七日の円融院扇合せ、寛治三年八月二十三日の四条宮(後冷泉院の後寛子)扇合せ、保延元年五月十七日の女院(待賢門院璋子)扇合せなどがある。

古今著聞集に藤原時代、小野道風、藤原佐理とともに三蹟とよばれ書道をもつて有名な藤原行成が扇合せに趣向をこらして一等となつた事が出ている

行成卿いまだ殿上人のころ殿上にて扇合せといふことありけるに、人々珠玉をかざり金銀をみがきてわれおとらじとなみあへりける、この卿はくろくぬりたるほそぼねに、黄なるかみはりて楽府の要文を真草にうちまぜてところどころかきていだされける、御門みかど御覽ぜられて、この扇これ、いづれにもすぐれたれとて、御前にとどめられるとかや

とある。

京都嵐山に舞妓などの手によつて無数の扇を川に流す三船祭りがある。

朝治初年富岡鉄斎が神主をしていた京都市右京区嵯峨朝日町車折神社くるまざきは近年境内に芸能神社を建てた。太秦うづまさの撮影所に近い地の利もあつて人気稼業の参拝客が多い、拜殿や奉納所には舞扇、おひろめの手ぬぐい、三味線の撥などがいっぱい、その上金融、商業関係者の参詣もめだつている。

三船祭(舟遊祭)は昭和三年からはじめたもので、祭の名は漢詩、和歌、奏楽に長じた源経信の故事から名付けられたという。

五月第三日曜日十三時半神幸は数百人の供を従えて、車折神社を立ち三条通り臨川寺松原渡月橋を経て剣先から大堰川に浮ぶ御座船に移る。十四時舟遊びがはじまり竜頭船では管絃が奏され鸕けます首船では迎陵かりよびん頻胡蝶こちようが舞われる。

午前中から装をこらして待ちうけていた芸能界有志社中の参加船(詩歌、俳諧、書画、献花、献茶、稚児、糸竹、謡曲、小唄など)三十余艘は列を整えて上流の嵐山温泉あたりまで漕ぎ上る。やがて御座船が、かなめ岩近くに棹を止めると奉行船の指団に応じて随待船が次々に芸能を奉納する。山の緑をうつす水の清さ、その川面に

静かに棹さして管絃琴、尺八、謡曲などが奏される。一方流扇船から京都扇子団扇業組合の人々や舞妓達の手で芸能上達と厄払いの意味をこめて無数の扇が清い川面に流される。十六時神幸は渡月橋北詰の頓宮に還つてこの雅びやかな舟遊びを終る。

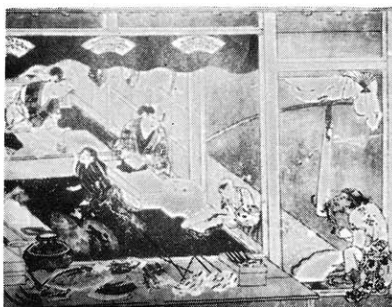
翠を湛える嵐山を背景に清い流れに舞妓の手より色とりどりの舞扇が投げられ、ひらひら風に舞つて川面を彩る無数の扇、誠に古雅な日本趣味豊かな行事である。

扇をもつて西の山かげに沈もうとする太陽を招きかえしたという説話は、音戸の瀬戸の平清盛を始め、鳥取の宇文の長者、千葉の蘇我の大炊、兵庫の朝日長者など各地に伝説があるが、熊本県菊地郡米原長者は用明天皇のころ長者号をたまわり、奴婢や牛馬が干にあまり、東は菊地から西は山鹿の義賀の浦まで三千町の田を領していた、毎年一日のうちにこれだけの田を植える習いであつたが、ある年田植なかばで日がかたむいた。長者が金の扇をひらいてさしまねくと、すでに沈まんとする太陽は招きに応じてもどつたが長者は日を招いた罰をうけてその夜のうちに屋敷をことごとく焼かれたと伝えられているのである。

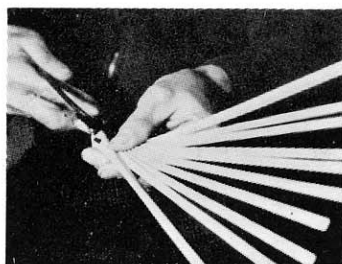
扇の用途は風を求める事以外、儀式や踊りに使われるが落語家が高座で使う扇は何にでもなる。筆、笛、とつくり、杯、櫓、權、三味線、撥、弓、鎗、薙刀、刀そのほか何にでもなるので落語家は扇がなければ商売に差支えるであらう。

これ等団扇、扇は現今暑中見舞の贈りものなどに使われるものが多く、宣伝や祭礼から最近では野球の応援などにも用いられるので国内各所で大量に製産されている。

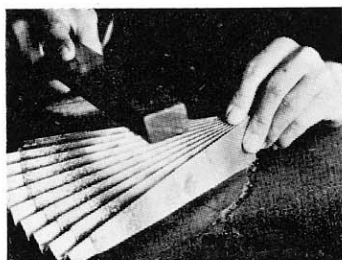
特に岐阜、京都、名古屋、東京、四国、房州などが著名な生産地のようであり、四国の団扇の如きは寛永年間



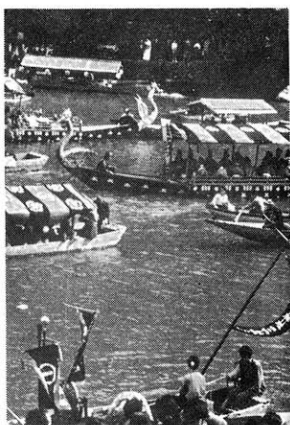
江戸時代の扇子の店



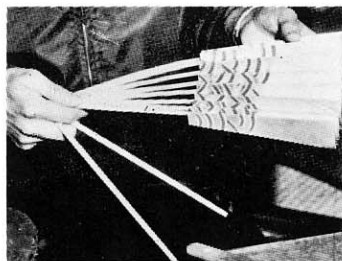
① かなめ打ち



② 紙折り



扇流しのある嵐山の三船祭



③ 折った紙に骨をさし込む

の古くより金刀比羅神社参詣客のお土産うちわに始まり、暑中見舞の贈りもの、宣伝、広告土産等と活用され生産も高まり年間生産八千万本といわれて居り、岐阜の水うちわや京都の手芸的な作品等それぞれ特徴あるものを生産している。特に讃岐団扇は、これが丸亀につたわつたのは寛永十年で金刀比羅大権現の別当が土産物として思いついたことにはじまり

伊予竹に土佐紙はりてあわ（阿波）ぐれば

讃岐うちわで四国（至極）涼しい

の洒落歌で知られ、その後天明年間、江戸詰の丸亀藩士がとなり屋敷の九州中津（大分県中津市）藩士より、その製法をならい覚え、これを藩が奨励したのでいよいよ盛んになった。年産八千万本は全国製産量の八割をしめ、然かもこれが町の人々の手仕事によつて製産されているので、讃岐の代表的産物といわれている。

この製作には竹の乾燥に始まり、割り、きざみ、骨仕上げ、色だし、かなめ打ち、末すき、紙折り等々多くの生産工程を経る訳であるが多年の手練によつて加工され紙の貼つけには、ベタ貼り、袋貼りとも刷毛を用いるのであつて平安朝の昔から刷毛を使用しておつたと推定されるが、これには一定した様式の刷毛ではなく思い思いの刷毛を使つておつたものの如く、最近、産地によつては、ブラシを使用する向きも多く、ところによつては、（山陰）団扇に刷毛を使用せずブラシまたはタワシを使つているところもあるといわれている。

長ばなし扇をひろげてはたたみ

風鈴を扇でならす暑いこと

音頭とり口に扇のふたをして